

書 評

国際連合『国内人口移動の測定方法』

United Nations, *Methods of Measuring Internal Migration*,
(Manuals on methods of estimating population,
ST/SOA/Series A/47), 1970, 72 pp.

国連人口部は、人口委員会の勧告にしたがい、人口分析の方法に関する手引書をいく冊か刊行している。人口問題をめぐる議論が一段と活発化してきている昨今、議論の適確なそして冷静な展開のためには、何よりも、信頼のできるデータとそれを分析するための適切な分析方法の習得が必要であるが、国連人口部によって作成されつつあるこの一連の手引書 (*Manuals on methods of estimating population*) は、こうした要請に答えるべき格好な書物である。

とくにわが国では、人口学 (demography) の意味が十分に認識されていず、したがって、人口分析の方法を解説した適当な書物も数少ない実情である。たまたま、最近、わが国でも、地域人口移動の激化とゆき過ぎた都市化とによって、人口移動に関する関心ととみに高まっている。しかし、問題意識は高まっても、人口移動現象を包括的に、また緻密に分析した研究成果はまだ余り発表されていない。そのひとつの原因は、人口移動に関する統計資料が十分豊富ではないことにあると思われ、さらにまた人口移動の分析方法に関する解説書が乏しいというところにも原因があると思われる。

そういう意味において、ここに紹介する書物の価値は、われわれにとって、非常に大きいと言わなければならない。ただし、注意すべき点は、この書物は人口学の立場から書かれたものであり、人口移動の測定方法に関する書物であるという点であって、この書物に、人口移動の経済学的あるいは社会学的分析を期待する読者があるとすれば、それは見当ちがいの言わざるをえない。あくまでも、人口分析の解説書であるところに本書の特色があるとみるべきである。

本書の構成はつぎのようになっている。緒論：基本的概念と定義、データの主要な源泉。このうち前者では人口移動にかかわる基本的概念（たとえば、「人口移動」とは常住地の移転をいうのであって、通勤・通学などの移動は含まない）の説明や gross migration と net migration の定義などが与えられ、後者では、人口移動に関するデータの源泉として、人口センサス、標本調査および人口登録が指摘される。ついで、第I章：人口センサスからえられる人口移動のデータでは、出生地、居住期間、従前の住所、一定期間前の住所の調査から人口移動を計測することができるということが説明され、それらの調査結果がどのように利用されるべきかが説明されている。第II章：純移動の間接的計測では、動態統計法および生残率法によって純移動（転入と転出の差）を計算する方法が解説されている。第III章：農村都市間移動の計測では、人口移動の主流を構成する農村から都市への人口移動を計測する方法が、直接法と間接法について説明されている。最後に、第IV章：率、比率その他の指標では、移動率、移動比率、差別移動指数、移動速度指数など、人口移動の計測結果を表示し、またその意義を明らかにするための各種の指標の説明がなされている。

これらの諸章からなる本文のほかには付録がつけられており、それは、I. 人口分析における継続的人口登録の利用と、II. 人口分析における標本調査の利用の2編である。

すでにのべたように、本書は、人口移動の分析方法を解説した書物であるが、説明にあたって各国の実例を用いて具体的な計算が示されており、その内容は大いに読者の興味をひくものがある。たとえば、日本については、51ページに、昭和35年国勢調査の1年前の常住地調べによる県別流入人口と昭和34年住民登録移動人口調査による県別流入人口との比較が示され、両者のあいだにみられるズレの分析が例示されている。そのほか、52～53ページに与えられているオランダとスウェーデンの人口移動の時系列的変化の例も面白い。

(岡崎 陽一)